

茅ヶ崎の観光史と展望

Retrospective and Perspective of Tourism of Chigasaki City

海津 ゆりえ*

Yurie KAIZU

Abstract

Chigasaki is not the big touristic city such as Kamakura, Yokohama nor Enoshima. But from old times, many people came and went through Chigasaki, sometimes stopped over. In Edo period, Tokaido, the major route connecting Edo (Tokyo) and Kyoto. And also middle point of Oyama Kaido, connecting Ejima Shrine, Yugyo Temple and Oyama Afuri Shrine. In Meiji period, Chigasaki seaside was used for new recreational method 'sea bathing', and second residential area, especially for artists, novelists, actors, musicians and their relatives. The sanatorium 'Nanko-in' has cured many people. Chigasaki was like a healing town or cradle of culture. Although Chigasaki citizen tend to not wish to develop the city as touristic site, people have continuously visited Chigasaki with many personal purpose.

This report is based on a lecture for undergraduate students from 1st to 4th year named 'Sogo A', also opened for citizen audit students.

1. はじめに

今日、地方都市に所在する大学は本来的な教育の場であるだけでなく、所在都市のステークホルダーとなることが期待されている。大学は人材育成の場であると同時に専門領域に関する知財の集積であり、若年層の短期居住者を多量にかかえる人財ストックである。また学生にとって地域社会は学びの場であり、仮の居住を通じたもっとも身近な実社会である。一人っ子家庭が増え、地域社会と家庭や子供の乖離が著しい今日、大学在学時に得る地域との関わりは、学生にとって初めての地域社会体験であり、第二のふるさととなる可能性も高い。大学は、これらの多元的な地域との関わりを介して地域の豊かさ向上に貢献し、それにより大学自体の質を深めていくことが求められている。

それは、人口約23万人の神奈川県茅ヶ崎市に所在する唯一の大学である本学も例外ではない。大都市圏に立地する大学と異なり、学生の四分の一を神奈川県民が占め、残りの大半を南東北や北関東他各県各国出身学生が占める典型的な地方大学であり、茅ヶ崎市や近隣の寒川町等の地域づくりに貢献する役割をもっている。

このような発想に立てば、大学カリキュラムの中で茅ヶ崎市に焦点を当てた、「茅ヶ崎学」を進めることは重要である。2010年度春学期の「総合科目A」にて開講された『茅ヶ崎学事始め』は、このような意識に基づいて構想されたものである。本稿及び次稿は、この総合科目Aで2コマ分として開講した講義群のうち二回のコマの報告をもとにしている。具体的には以下の通りである。

* 文教大学湘南総合研究所研究員・文教大学国際学部准教授

- ・茅ヶ崎の観光史と観光の現状（講師：大村日出雄（茅ヶ崎市観光協会会長）、新谷雅之（茅ヶ崎市観光協会事務局長））、5月31日開講
 - ・茅ヶ崎の農業・漁業（講師：糸仁夫（茅ヶ崎丸大魚市場代表取締役社長）、青木隆（JAさがみ茅ヶ崎営農センター））、6月7日開講
- なお筆者は、これら2コマの幹事及び進行として講義の企画に携わった。講義内容の紹介に際しての責任の一切は筆者が負っている。

2. 茅ヶ崎の観光史とその変遷

(1) 茅ヶ崎の観光史と区分

観光学では観光を「楽しみのための旅行」（溝尾、2000）あるいは「一定期間（国際観光では24時間以上）在住地を離れ、また帰還する行動」などと定義づけているが、これらは観光者にとつての観光の定義である。本稿では訪問を受ける側である地域に視点をおいて論じるため、これとは異なる定義を用いなければならない。そこで本稿においては、観光を「域外から訪れた者が一定期間域内にとどまり、資源の消費・および域内の人々との交流を行って、再び出ていくこと」と定義する。

訪れられる場としての茅ヶ崎が、過去にどのような観光を受け止めてきたのかを地理的特徴や時代背景を含めて整理すると、概ね次の5つの時代に区分することができる。

- ・第一期：観光前史—茅ヶ崎の形成期
- ・第二期：海水浴場普及期
- ・第三期：健康・保養基地期
- ・第四期：湘南文化発祥期
- ・第五期：サーフィンとスポーツ文化期

(2) 第一期：観光前史

地域の現在および将来の観光を考えるうえで、土地形成史は重要な背景である。最新の氷河期には海水面は今から10cm以上低く、今の沖合まで陸が続いていた。茅ヶ崎市は縄文海進の頃（今から6千年前）は、現在の堤、殿山公園あたりまで海岸線であった。その後、いくつかの段

丘をつくりながら汀線は下がり続けたが、現在の海岸線が形成されたのは富士山宝永火山の噴火により、火山灰が神奈川県南部一帯に一斉に降り注いだ後と伝えられている。これにより、東海道辺りより南側は砂丘の上にある。これら的大幅な海岸線の移動に加えて河川による土砂堆積を得て徐々に陸地化した茅ヶ崎市には、時代時代の貝塚が形成され、今も発掘が続けられている¹。

茅ヶ崎市に南北に線を引き、その断面をみると、数ヶ所で段差ができていることがわかる。これは海岸段丘であり段丘のエッジ付近には古来道が通っていた。それが現在の芹沢、小出、堤下を通る道や東海道（国道1号線）、JR、鉄砲通りなどに換わっている。134号線は最も新しい道である。JR以南は比較的最近まで広大な砂丘と泥湿地であったという。

茅ヶ崎はを通る主要な交流の道は東海道であったが、宿場は隣接する藤沢、平塚にあり、茅ヶ崎には宿はなかった。かろうじて相模川が増水して渡れない時に避難した宿（間の宿）があったにとどまる。江島神社から遊行寺^{あい}を通して大山阿夫利神社へ向かう参詣道（大山街道）も通っていた。赤羽根で東海道と分岐し香川を通過して、大曲橋へ至る「田村道」である。人々は盛んに茅ヶ崎を行き来したが滞在することはなかった。この特徴は、現在の茅ヶ崎に通じる点である。北部に比べて開けていた南側は、砂丘の先に漁村集落が点在するのみであった。

(3) 第二期：海水浴場普及期

1) 湘南海岸の海水浴場開設の動き

日本を世界に開いた港に横浜港（1849）は長崎、神戸に並ぶ世界の玄関口となり、とくに政府要人や外交官が上陸する場所となった。文明開化とともに近代化を目指した日本政府は、海外から多くの学者や技術者を招いた。俗に「お雇い外国人」と呼ばれる人々である。山手一帯がその居留地となった。彼らは後の日本の観光に大きな影響を与え、湘南地域も深く関わっていた。

彼らが日本に紹介したレクリエーションの一つに「海水浴」があった。海水浴は、ヨーロッパ特にフランス人やドイツ人にとっては夏の過ごし方として一般的であったが、日本にはそのような海との関わり方は存在しなかった。片瀬や七里ヶ浜等で海水浴をした外国人のニュースが報道されるようになり（注1）、1985（明治18）年、初代軍医総監松本順によって大磯に公設海水浴場が開かれた（大磯町ホームページより）。それから湘南海岸一帯は海水浴の地として知られるようになり、茅ヶ崎にも1898（明治31）年に海水浴場が開設された。

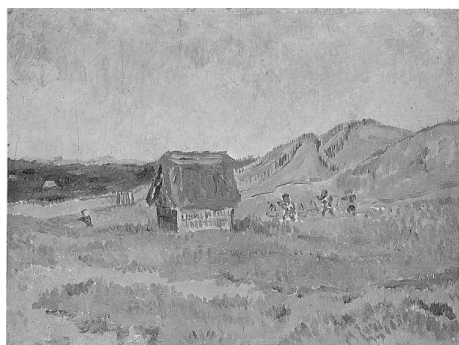
2) 鉄道開通と別荘地化

湘南における海水浴場の普及の背景に、鉄道の敷設があった。明治5（1872）年に新橋～横浜間に開通した鉄道は、明治20（1887）年に国府津まで延伸され、茅ヶ崎駅は明治32（1898）年に開設された。これにより都市住民も湘南に足を運びやすくなり、温暖な気候の茅ヶ崎は、数々の著名人の別荘地として利用される土地となった。茅ヶ崎に別荘を構えた文化人には、九代目市川團十郎（1838-1903）、川上音二郎（1864-1911）・貞奴（1871-1946）夫妻、平塚らいてう（1886-1971）、伊藤博文（1841-1909）等がいた。

(4) 療養の地としての茅ヶ崎

茅ヶ崎駅開設の翌年1899（明治32）年、南湖に結核療養所「南湖院」が医師高田畊安（1861-1945）によって開院された。1945（昭和20）年に海軍に全面接収されるまで、多くの療養者を迎え、東洋一のサナトリウムと呼ばれた。療養に訪れた著名人には作家の国木田独歩（1871-1908）、岩手県上沢出身の画家の萬鉄五郎（1885-1927）らがいる。彼らは晩年を茅ヶ崎で過ごし、没した。萬は茅ヶ崎の風景を愛し、南湖や柳島の風景画を「描きまく」（村上、1991）った（図1）。

風光明媚で温暖、かつ海水浴、結核療養などに利用されてきた茅ヶ崎は人を癒す風土を持ち合わせており、都市に近いことからリゾート基地としての要素を備えているといえよう。



出典: <http://homepage3.nifty.com/ShonanZaZa/starthp/subpage19.html>

図1 萬鉄五郎が描いた茅ヶ崎南部（「砂丘の風景、1926」）

(5) 劇場人・文化人の愛した茅ヶ崎

茅ヶ崎に一時居住あるいは別荘として通った人々の中には、政界・財界に加えて劇場人や作家、画家などの文化人・芸能人が多かった。

作曲家の山田竊作（1886-1965）は1926年から6年間、茅ヶ崎市に在住し、『赤とんぼ』等の名曲を残した。映画監督の小津安二郎（1903-1963）は、茅ヶ崎館を定宿として松竹撮影所に通い、『晩春』『東京物語』『麦秋』等の名作を作った。茅ヶ崎館には今も小津が泊まった部屋や、俳優等とつづいた鍋が名物メニューとして残されている。松竹の人気俳優の上原謙（1909-1991）は1965年に東海岸にパシフィックホテルをオープン、息子の加山雄三と共同経営にあたった（1970年閉鎖）。加山雄三は2010年7月に茅ヶ崎市名誉市民として表彰されている。

2010年に生誕80周年を迎えた作家の開高健（1930-1989）は、1974（昭和49）年療養を兼ねて茅ヶ崎市に移住し没した。住居は現在開高記念館として週末のみ開館している。1976（昭和51）年には茅ヶ崎市出身の桑田佳祐がサザンオールスターズを結成し、茅ヶ崎や鎌倉、藤沢の名所を織り込んだ歌曲を多数発表している。

(4) 湘南文化からサーフィンへ

第二次世界大戦後の一時期、神奈川県内に駐留した米軍兵士が、茅ヶ崎市内のライブスポットでジャズや流行のサウンドを伝えたことがき

っかけとなり、茅ヶ崎は米国のブームがいち早く飛び火する土地となった。1960年代には、カリフォルニアで人気が上がったザ・ベンチャーズのスタイルを真似たグループサウンズやカントリー・ミュージックのバンドがいくつも誕生した。

1950年前後には、米兵が楽しんでいたサーフィンが茅ヶ崎海岸でいち早く取り入れられた。茅ヶ崎館には、日本製最古の木製サーフボードが展示されている。堂々としたロングボードで、玄関で来訪者を出迎えている。同時期にサーフィンブームを迎えていた米国西海岸と茅ヶ崎は、音楽を介した交流がすでにあった。サーフィンは湘南サウンドと同時期に普及を始め、しだいにファッションやライフスタイルも輸入されるようになり、湘南スタイル、湘南イメージが形成されていったのである。

3. 茅ヶ崎観光の今日

(1) 茅ヶ崎観光の「外観」

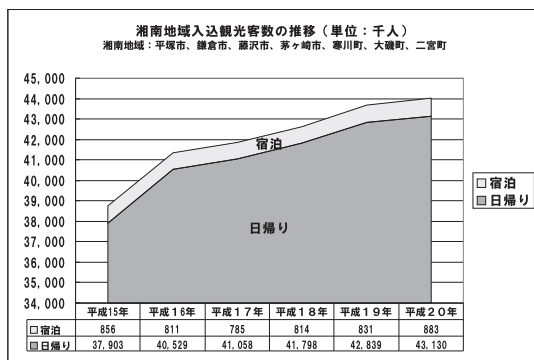
1) 観光入り込み客数

神奈川県調査による茅ヶ崎市への観光入り込み客数データ（平成20年度）はのべ1,403千人であり、神奈川県全体の観光入り込み客数の0.82%に相当する（図2）。うち宿泊客数は17千人（1.18%）であり、県全体の0.12%に相当している。大半が日帰り客であることがわかる。観光消費額は市全体で1,208,018千円、県全体の0.54%に相当するが、入り込み客数の対県比よりさらに低い割合となっている。一方、茅ヶ崎市を含む湘南地域の観光入り込み客数推移（図3）をみると、年々増加傾向にあり、湘南地域の人気そのものは上昇しているといえる。

	平成20年観光入込客数（千人）					
	延人数 （千人）		宿泊 （千人）		日帰り （千人）	
茅ヶ崎市	1,403	17	1.18%	1,386	98.82%	
神奈川県全体	171,186	13,936	8.14%	157,250	91.86%	
対県比	0.82%	0.12%			0.88%	

（資料：神奈川県）

図2：茅ヶ崎市への観光入り込み客数（平成20年度）



（資料：神奈川県）

図3：湘南地域の観光入り込み客数の推移

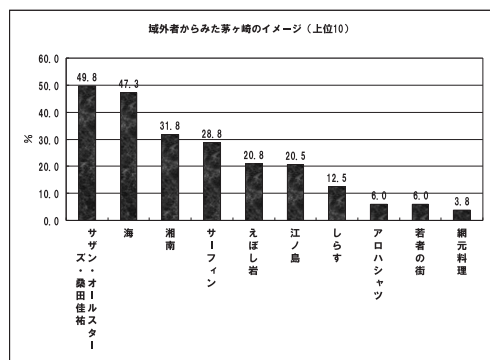
2) 茅ヶ崎イメージ

茅ヶ崎商工会議所は、平成21年度に「域外からみた茅ヶ崎のイメージと魅力」と題する調査を実施した。これによると、域外者からみた茅ヶ崎のイメージは図5の通りであり、キーワードとして挙げられた上位10をみると、サザンオールスターズ・桑田佳祐（49.8%）、海（47.3%）、湘南（31.8%）、サーフィン（28.8%）、えぼし岩（20.5%）、江ノ島（20.5%）、しらす（12.5%）、アロハシャツ（6.0%）、若者の街（6.0%）網元料理（3.8%）などが並ぶ（図4）。一方、「湘南がイメージできる市町村」を尋ねた市民・域外者へのアンケートによると、市民の94.4%、域外者の59.3%が茅ヶ崎を挙げており、いずれも1位である。茅ヶ崎は湘南のシンボルとしてイメージされていることが示唆される。

(2) 観光イベント群にみる茅ヶ崎イメージの「形成」

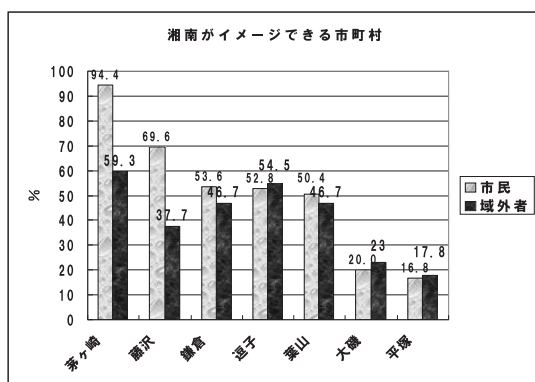
茅ヶ崎市には現時点で観光計画は作られていないが、伝統的に開催されてきたイベントや新しいイベントが創作されているほか、個人事業が営む観光事業が継続的に開催されている。

上記のうち大岡越前祭・湘南祭・浜降祭・花火大会をまとめて「四大祭」と通称しているが、大岡越前祭を除いてすべて海岸を舞台として行われるイベントであった。これらに加えて、



(出典：茅ヶ崎商工会議所「域外からみた茅ヶ崎のイメージと魅力」(平成22年3月))

図4：域外者からみた茅ヶ崎のイメージ（上位10）



(出典：茅ヶ崎商工会議所「域外からみた茅ヶ崎のイメージと魅力」(平成22年3月))

図5：「湘南」がイメージできる市町村

2009年から「アロハフェスタ」、2010年から「茅ヶ崎ジャンボリー」が里山公園で開催されるようになり、徐々にイベントの時期、場所の分散化が図られるようになった。

(3) 新しい茅ヶ崎形成イメージ形成に向けて

現在、茅ヶ崎市観光協会と商工会議所が中心となって進めている茅ヶ崎イメージ戦略がある。通称「アロハビズ」と呼ぶアロハシャツ推進運動である。夏期（6月1日～9月30日）のアロハシャツ着用を進める運動で、市役所や商工会議所などの公的機関、市議員、市内事業所などにも協力を呼びかけてここ数年で普及・浸透が見られるようになった。

発端は、市民花火大会を盛り上げる方策として、浴衣着用を奨励しようと「浴衣委員会」を発足したことに始まる。若者の浴衣離れで普及

が進まなかったが、ハワイで浴衣地をもとに日系ハワイ移民がシャツ創ったのがアロハシャツの始まりである故事を借り、「アロハ委員会」を結成し夏のアロハシャツ着用をすすめた。背景にサーフィンを介したハワイとのイメージ上のつながりがあった。一時のブームに終わらせず、市全体を貫くコンセプトにするため、商工会議所が中心となって公的機関への浸透を進め、毎年新しいデザインを発表することによって商業効果を上げている。

イベント群にもみられる「海辺の町の楽しみ」に通じるファッションとして、アロハシャツは徐々に定着しつつあり、アロハシャツが似合う町という茅ヶ崎の新しいイメージ形成もできつつあるようである。

表1 茅ヶ崎市のイベント

名称	時期	場所	概要
大岡越前祭	4月中旬の土日	浄見寺	大岡越前の墓前祭
湘南祭	4月	サザンビーチ	バラエティ型イベント
茅ヶ崎海岸浜降祭	7月	茅ヶ崎海岸	寒川神社の神事。茅ヶ崎市・寒川町一円の神社の御輿が海岸に集結し禊ぎを行う。
サザンビーチ茅ヶ崎花火大会	8月第1土曜日	サザンビーチ	市民が揚げる花火大会
茅ヶ崎里山ジャンボリー	9月23日	里山公園	カントリーミュージックの祭典
アロハフェスタ茅ヶ崎	10月	市民文化会館	フラ、ハワイアン、サーフィン関連出店とショー

4. 茅ヶ崎観光への課題と展望

(1) 住むための町は観光の町になりうるか

第2章で述べたように、茅ヶ崎市はもともと街道筋に宿場がなく、滞在型観光地としての素地がなかった。むしろ、サナトリウムや海水浴、別荘などによる一時居住の地であった。一方で芸術家や文筆家に愛される穏やかな環境をもちあわせており、人を憩わせ、癒し新しいものを生み出す力を与える天然のリゾートとしての特性を有していると言える。現在も、海遊びを楽しんだり温暖な気候を求めたりする都市住民の流入は続き、市全体としての人口は増加傾向にある。茅ヶ崎市は「住んでみたいまち」なのである。その反面、鎌倉駅周辺のような観光客のためのまちづくりを望まない住民が多いと言われている。宿泊施設や駐車場などのインフラが不足していることも事実である。無論住み心地の良さを乱す観光振興は望ましいものではないが、今ある資源を享受するのみで完結する地域づくりは、新しい知恵や情報の流入を阻むことにつながりかねない。

(2) 自転車のまちづくり

茅ヶ崎市のまちづくりと観光の接点において、現在いくつかの課題が浮かび上がりつつある。そのひとつが自転車である。茅ヶ崎市では循環型社会づくりの一環として、移動交通手段としての自転車が着目されている。すでに都市政策課で自転車のまちづくりに動き出しているが、産業振興課では自転車ツアーの造成（通称「ロコクルーズ」）が試みられ、商店会連合会でも自転車マップづくりや自転車安全マナーの普及活動などを展開している。現在のところ、共通キーワードとしての自転車をめぐる各者の方向性や目標のすりあわせ段階に至っていないが、自転車の町・茅ヶ崎に向けたコミュニケーションの場を早急にもうけ、協力関係を構築していくことが必要といえる。

(3) 北部活性化と茅ヶ崎観光

これまでの茅ヶ崎市のまちづくりはJR線以南に重点が置かれ、観光も南部に偏りがちであった。芹沢・行谷などの北部は地区の成立過程や生業などが南部と全く異なり、歴史も深い。現在においてもほとんど光を当てられずにいる。その中で地区によっては過疎化・高齢化がすすみ、広大な農地がそのまま耕作放棄地となりつつある。

長い時間をかけて構築されてきた集落の人口をすぐに取り戻すことは困難であるが、地区と関わり、訪れる人を少しでも増やし、土地の維持と地域活性化を図ることが必要である。平成22年度を最終年度とする市の国県事業「北部活性化プロジェクト」が現在進められ、農作業や農産品直売などが行われているが、終了後をにらみ、他の形で活性化プロジェクトを進める必要がある。

4. おわりに

「茅ヶ崎は観光地ではない」「観光地になりたくない」という言葉を誰彼なくよく耳にする。「観光」という用語には人それぞれのイメージがあり、これらのコメントはその先入観に照らしているのであろう。

確かに都市のライフサイクルから考えると、既存資源への依存傾向が強く、努力を怠る地域は魅力の掘りおこしや磨きあげがなされず、人々の足が遠のき、地域と外の循環が途絶えて老化が進んでいく。観光・交流を拒むことは望ましいことではない。しかし、茅ヶ崎は、観光略史にあるように、交流を拒むというわけではなく、背のびや無理な整備をせずとも、その時代時代の人々に愛され、活かされてきた。潜在力を活かして身の丈に合った交流をして茅ヶ崎にしかない文化をつくってきたといえる。茅ヶ崎は自然も文化も非常に豊かな土地である。その豊かな資源の魅力をほりおこして磨き、茅ヶ崎らしい個別多彩な交流を市全域で広げることが今後の茅ヶ崎市の観光振興の方向性のひとつ

といえよう。茅ヶ崎らしいまちの発展のありようと観光の関わり方については、今後多様な主体を交えた議論が必要なテーマと言える。

参考・引用文献

- ・茅ヶ崎商工会議所（2010）『域外からみた茅ヶ崎のイメージと魅力』、茅ヶ崎商工会議所書
- ・村上善男（1991）『萬鐵五郎－土沢から茅ヶ崎へ』有隣新書39、有隣堂